

1 授業を構成するにあたって

歌唱の授業において扱われる共通教材は、一般に歌詞と音楽の結びつきが非常に強い。作曲者はおそらく、歌詞のもつ世界観やメッセージを深く読み取り、それを最大限に生かす形で音楽を構築したに違いない。

しかし、これまでの授業実践を振り返ると、楽曲をそのまま視聴した場合、生徒の関心が歌詞の内容分析に偏り、音楽的な側面への着目が十分に深まらない傾向があった。そこで、音楽科として、音楽固有の要素により焦点を当てるために、「音への気づき」から始まるアプローチによって、作曲者の意図を多面的に捉える歌唱授業の構築を試みた。

2 授業の実際

(1) 音楽的要素の分析

授業の導入では、まず生徒が音楽の構造を主体的に捉えることができるように、歌詞を記載していない楽譜を配付し、楽曲を純粋に「音楽」として分析させる活動から始めた。伴奏音源を流しながら、旋律をピアノで演奏することで、歌詞という言語情報を排除した状態で音楽を聴かせた。これにより、生徒は言葉に左右されず、旋律の動きや和音の変化、リズム、強弱などの音楽的特徴に自然と意識を向けるようになった(写真1)。

生徒たちは、「音の高さが上下する」「伴奏が1段目と2段目で変化している」「旋律の音のつながりがなめらかである」といった基本的な特徴に着目し、それを自らの言葉で記述していった。また、曲の進行や形式(A-B-A'構成)、拍子の安定感、調性の変化といった側面にも言及する生徒が多く、分析眼が育ってきていることがうかがえた。

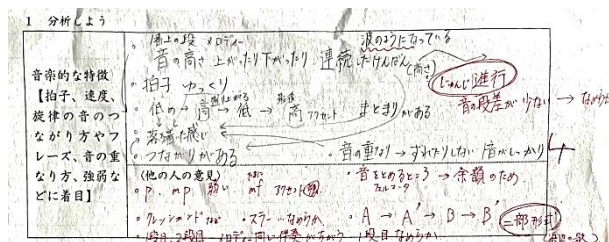


写真1 音楽の特徴の分析

(2) 歌詞との関係性の考察

音楽的特徴に対する気づきをもとに、「作曲者はなぜこのような音楽にしたのだろうか」という問いを投げかけた。生徒には教科書に記載された歌詞を再度提示し、音楽的特徴と歌詞の意味を結びつけて考えるよう促した。

生徒の考察からは、以下のような多様な見解が挙がった。

- ・音のなめらかさは、思い出を回想しているような心の動きを表しているのではないかと。
- ・「遠い空」の部分で音量がpになるのは、過去の思い出が手の届かないものになっていることを象徴している。
- ・2段目の軽快な伴奏は、楽しかった思い出の中の「ワクワク感」や「夏の明るい光」を感じさせる。

中には、「歌詞に表れた自然の情景と旋律の流れが連動している」「曲の途中で一度雰囲気が変わるのは、記憶が鮮やかになったり、切なくなったりする心の動きの表れではないか」など、より深い心理描写に着目する生徒もいた。生徒の分析ワークシート(写真2)には、それぞれの視点での解釈が丁寧に記されており、音楽と言葉の関係を主体的に読み取ろうとする姿が見られた。

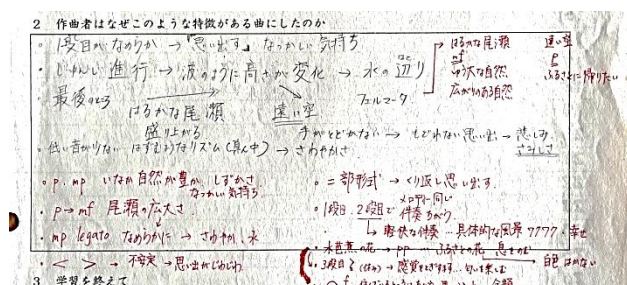


写真2 音楽の特徴と歌詞の内容の関連付け

3 参考文献

- ・小原光一 他(2025)『中学生の音楽 2・3 上』教育芸術社
- ・小川昌文 他(2023)『よくわかる音楽教育学』ミネルヴァ書房
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領音楽編』
- ・国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校音楽】』東洋館出版